



中央が筆者

“マンタ”と“ソーブ” ～水泳と私～

会員

西内 聖<34期>

土佐の海辺で産湯につかり、海に潜ってはその日のオカズを探し、台風が接近すると大波がきたと大喜びしてご近所からのひんしゅくを買い、“水泳小僧”と名をはせましたが、それも遥か遠い昔の出来事。

ヒョロヒョロの体型もいつしかみっちりお腹に肉がつき、ふさふさした頭のとっぺんは秋の風情、揉めごとと稼業に心臓も弱り、視力も弱まり、奥方様からはまたズボンのサイズが合わなくなったとぶつぶつお小言を頂戴し、ただひたすら腰を低くして生活する日々です。

そんな折、これではならじ、身体を絞り上げ、むかしの身体に少しでも近づけて、ここで一花咲かせねば故郷の御母上にも顔向けできないと一念発起して始めたのが水泳です。

職業柄か、手の平のどこで水圧を感じるか、できるだけ頭を上げることなく呼吸をするにはどうするか、なるべく音をたてずに泳ぐにはどうすればいいのか、体を浮かせるにはどうすればいいかなどと、最初は屁理屈ばかりをこねくり回し、泳げない知人からは、「折角、プールで向こう岸まで泳いだのに、何でまた戻って来るのだ」と冷やかされていました。

けれども100mでの息切れも、いつの間にか1000mを超え、何と1500mも30分弱でスイスイーっと泳ぎ切れるようになりました。泳ぎ初めの人たちを脇目に、

「ああ自分は大海原を悠々と泳ぐマンタになった」と勝手に思い込み、プールから上がると、「見たか。土佐のマンタ泳法！ イアン・ソーブといい勝負だ」と胸を張って豪語しようと周りを見渡すと、アレッ、全員が水の中。

事務所に戻り、泳いだ距離を電卓で叩き、「大島沖まで泳いだ。もう直ぐ八丈島の灯りが見える」とニンマリ笑うとスタッフ全員が呆れ顔です。

何をなすにも良き手本からと、師匠を求めて東に西に。今ではヒトでは足らず、上野動物園のペンギンさんから葛西臨海公園のマグロさんにまで広がり、ついにはメダカくんにもまで手を伸ばし、餌だ水替えだと大騒ぎしています。

悩ましく、嫌な事があったとしても、水に流せば何とかなる。これもまた水泳の効能のひとつです。けれども、駅を降り、左手を行けばプール、右手を行けば職場です。一步目の踏み出しは右にすべきか、左で良いか。築地本願寺の御門前でこんな悩みを朝から起こし、御本尊様より「まだ、まだ、青いのう」とのお叱りを受けています。

会員の皆様、趣味を持ちましょう。心の面と身体を鍛える面の2つの趣味に弁護士業務を加えて3本柱でストレスの多い時を走り抜きましょう。